

新刊紹介

佛教の日本の展開

佐藤得二著

本書の著者は自分が佛教専門家ではないこと、本書が佛教專攻者に問ふべく書かれたものではなく、一般日本人に對して佛教がその缺くべからざる教養の一部であることを自覺せしめん念願から、書かれたものであることをことわつてゐる。もしさうならば、佛教に關して單に通り一遍の知識しかもたぬ者が讀後の感銘を記して以て本書の紹介に充てることが、全然無意味ではあるまい。

本書は第一章と第二章とに於て、最澄と空海との略傳と、それに加へて天台の空假中三諦の圓融、一念三千、五時八教の教判等、眞言の六大、三密、阿字本不生等の教理の要點を極めて簡明に敘述し、更に平安朝に於ける此等二宗の墮落、その時代の民衆信仰の形態としての因果應報觀の概観を與へてゐる。第三章は源信より法然・親鸞に至る淨土門の展開、「惡人を正實とする福音」が徹底されてゆく過程の敘述であり、第四章は道元及びその先達である榮西、第五章は日蓮、を取扱つてゐる。

此等の諸章に於て、著者はその意圖した念願を殆んど完全に成就した。著者が特に力を入れたのは親鸞・道元・日蓮に對してであるが、此等三者の各々のうちに脈打つ偉大なる信が、驚くべき程生々と、讀む者に迫り來る力を以て表現されてゐる。そ

のために著者は、一方では個々の教學の枝葉的なものを切り捨てて最も根本的なもののみを掴み出し、他方では彼等の傳記をその主要なる事件に從つて跡づけ、そして其等を彼等の魂を貫く信と自在に織り合はせて、或は圓熟沈痛なる、或は峻嚴透徹なる、或は熱烈過激なる、夫々特異の性格をもつ此等の偉人の内外渾然たる相貌を髣髴せしめ、彼等の氣魄を聳々と傳へ得たのである。そのことが、此等の魂に形影相伴ふ如く絡みついてゐる著者の熱情の力によることは勿論であるが、同時に隨所に點綴されてゐる宗教・教育・學問・政治等の現状への批判に現はれた著者の識見が、本書に一段と生彩を加へてゐることも亦見逃せない。そして此等の結果として、本書は専門的研究書が持ち得ない別種の意義と價值とを持つものとなつてゐるのである。

その外、本書に於て興味を引く點は、著者が上の三者の夫々に其鳴を與へ、夫々から學び得るものを學び取るといふ態度を示してゐることである。既に法然に關して、「惟ふに佛と衆生との間から、色々な介在物を除き去つて、衆生の罪業と佛の慈悲とのみを残したのは、念佛易行門創設者の大功績であらう。一切宗教の眞の入口は、罪の自覺以外には無い」といひ、特に親鸞については、その惡人往生の法門は「佛教中の眞佛教なりと斷ぜざるを得ない」と言ふと同時に、道元の嚴肅なる求道精神に對しても熾烈の感激を寄せ、この開祖が、「但佛法の爲に佛法を修する」の正道から外れるならば、寺院の造營、教徒の増大等と雖も邪命によるとなし」とたとへ草庵樹下にてもあれ、法

門の一句をも思量し、一時の坐禪をも行ぜんこそ、誠の佛法の興隆にてあらめ」(隨聞記)と言へるに對して、「かくの如き一句、これが眞の精神文化である」と讃歎し、更に日蓮に關しては、その激越なる言動の蔭に潜む優しき心情と周到綿密なる研究態度とを指摘した後、彼より受ける教訓として、國家の生命力たる正法の樹立に對して學者が自らの使命を自覺すべきことを掲げてゐる。然も著者の共感佛敎諸流のみに止まらず、更に基督教、儒敎、神ながらの道にまで及び、此等の方面からの引例は豊富に本書を彩つてゐる。著者にとつては、此等は、如何に佛敎を語るからとはいへ、默過するには餘りに「惜しい眞理の消息」なのである。——著者自身にも現はれてゐる如きかゝる包容的態度を、著者は日本人の、特に神道の、特質として屢屢之に關説してゐる。「惟ふにこれは日本神道の敎へる大なる眞理の一である。八百萬の神々に各々の立場を認容する態度、たとへ異國の神でも、その神自身又は信徒にして、國家なり又人生なりに光明を與へるものならば、憚らずこれに頷く態度、即ち宗教的寛容をさらに一步進めた態度。神道がその成立に於て、崇敬の對象に於て吾人に訓へるのは、實にこれではあるまいか。一柱の、又は一群の神の外に、汝等何物をも拜すべからず、といふのが宗教であるとすれば、わが神ながらの道は實は宗教ではない。それは斯の如きあの宗この宗に超絶した(或は宗教以前の)普遍の敎である」。「佛敎の宏大と深遠とを以てして、民衆の説明し難き心情に棲む固有の神祇を消し得なかつた、或は消さうともしなかつたといふ所に、吾々は非常な興味

を引かれる」。然も日本人が信仰に不徹底な人間でない事だけは、傳敎に於て、弘法に於て、特に親鸞に於て、道元・日蓮に於て、十分學び傳へる。著者は弘法の本地垂迹説や、佛法によつて天も神も「威光」「勢力」を増大するといふ日蓮の考のみならず、親鸞の「彌陀のはからひに、はかられまつる道」にも日本特有の「信」の發露を見、道元の正法眼藏洗面などに現れてゐる深い清淨觀のうちにも、「きよし」「きたなし」を以て基本的な道德價值を表現した古代日本人の心情の流露を見る。「道元の血管には、この傳統的な清淨思想が流れてゐた。故に彼がその信念の最も深い所を表現するに當つては、知らず識らず日本人的表現を爲さざるを得なかつた」。勿論、如上の見解は、歴史的にも教理的にも、先づ檢討すべき複雑な問題を纏つてゐるであらう。特に最後の道元の如き場合には、殆んど凡ての宗教に見られる類例との比較も顧慮さるべきであらう。併し兎に角、それは、歴史の恐らく確實なる水脉に觸れたものとして、現在から將來へかけての吾が國の宗教の動向といふ見地からも、種々なる學的關心(例へば敎理學、精神史、歴史哲學、宗教心理學その他)の見地からも、今後十分に深く研究さるべき問題たるを失はないであらう。但し、著者が外來のものを營養とすることによつて天も神もその威力を増すといふ考へ方に賛同するのは、單なるショーヴィニズムの意味に於てではなく、反つてそのの克服のためであり、「眞理に根ざす所の物は憚らずに攝取」するといふ態度であることを、念のためにこゝわつて置く。

著者のかの包容的態度は、他方、實際の敎育に携るその經驗

とも關係があるであらう、種々の教が左程劇しく相排撃することもなく並び存してゐる吾が國の現状が、日本人の特質の顯著な現れと見得ると共に、この現状に面する實際的教育者もまた著者の所謂「日本的」な態度をとることを必然的に要求されるであらう。そして、この事實に一つの大きな問題が潜んでゐる様に思はれる。

維新以後わが國の文化は一種の混沌状態にあるわけであるが、混沌を眞に脱する道はそれを積極的に克服することの外にはなく、混沌を克服する唯一の健全なる道は、混沌が混沌でなくなる所までそれに徹することの外にはない。従つて日本文化や東洋文化への根本的な反省と西洋文化の出来る限り深く廣い攝取とが同時に行はれねばならぬことは勿論、この兩方向が分裂した儘で残らざるを得ない限りは、その分裂を荷ひ分裂に堪へて行かねばならぬ。混沌を克服する新しい創造の力はそこから養はれて来る筈である。言ひ古されたことではあるが、西洋文化と東洋文化の全體とが合流し、その意味で眞に「世界」の文化を荷つてゐる此の唯一の國が、將來の「世界」文化に對しても得る世界史的意義もそこにあることは疑ない。そのためには、宗教のみに就いていつも、佛教は現代の人心に深く根を下したものとなり得るために、そしてまた廣く世界をその國土となし得るために、恰も鎌倉時代に於て爲されたに等しい新しい飛躍を再び必要とするのではあるまいか。又、基督教も、その歴史的傳統をもたぬ國に移植されたといふことを積極的に生かして、西洋に於てそれに纏はつてゐる長い間の歴史的因襲を

一切捨て去つた自由清新なる形態を、日本的な（日本主義的ではない）基督教として建設し、更にそれを西洋の基督教自身に與へることによつて之に新しい展開を齎すといふ如き方向に進むべきであると言へば、單なる誇大な空想であらうか。それは兎も角、本書に現はれてゐる如き、そして一般の人々の抱いてゐる如き、自由なる包容的態度が、日本文化に含まれてゐる將來の方向と深い聯關をもつことは、間違ないであらう。

本書の優れた價值については、その初めに附せられた安倍能成先生の序に餘蘊なく説かれてゐる。たゞ本書が、如何なる宗教宗派に屬する又は屬しないに拘らず何人にも有益なる感ずるの餘り、こゝに蛇足を加へたのである。（岩波書店定價壹圓五拾錢）（西谷啓治）

ブルノー著「カントの哲學」篠原寛二譯

本書はブルノー・パウフ著「イムマヌエル・カント」（ゲッティンゲン叢書「哲學史」第五冊）の全譯である。同じ著者は本書に基づいて一九一七年に更に詳細な大部のカント研究書を同題名の下に發表して居るのであるが、譯者が前者を「内容に従つて」カントの哲學と改題された事は後者との混同を避ける上にも好都合である。

「近世哲學史」がその頂點に至る發展の道程に於て示すところの特性は、それが近世の一般文化生活の諸運動をそれ自身に關係させ、又それ自身に合一するといふ處に存する。そうして此の事は近世哲學史の連續的進展の過程に於て、一般文化的諸傾